

九月一日、土曜日。サンフランシスコまでの帆船、ステイグリッツ号への乗船を決断したあとは、時計の長針が回る速度が増した。

ライフル銃射撃練習は、午後二時過ぎに終了となった。始めてから、わずか三十分ほどしか経っていなかった。

が、チャンスの顔には驚きと満足とが混ざり合っていた。

「これはもう、天性の資質に恵まれているとしか言いようがない」

チャンスは感嘆の吐息を交えて言葉を口にした。

ライフルは、銃も弾丸も高価だ。無駄な射撃は禁物だった。が、さりとて技量未熟なまま終えるのでは、凶器を与えるも同然である。

短時間で終了を宣告できたことを、チャンスは心底喜んでいた。

アルバティーナもジョン・マンの訓練の様子を屋敷の玄関ポーチから見ていた。訓練の様子が気になって仕方のないデイジーに、付き添うように立っていたのだ。

早々に終わったとき、デイジーとアルバティーナは、ともに不安げな表情を見せた。ジョン・マンが使い物にならなくて、チャンスが見限ったのかと勘違いをしたのだ。

正味の褒め言葉を聞いて、初めてふたりの表情に安堵の色が浮かんだ。

「ライフル銃のケースを、ジョン・マンにプレゼントするのはどうかしら？」

発案したのはアルバティーナだった。

「剥き出しの銃だと見た目にも物騒だし、銃が傷むかもしれないもの」
アルバティーナの言ったことに、チャンスが大きくうなずいた。

「デイジーにそれを頼もうと思っていたところでした」

アルバティーナに、チャンスとジョン・マンは感謝の辞儀をした。

「ミシンなら、わたしは得意だから」

着ている服の多くを、アルバティーナは手作りしていた。

「サロンに入ったあと、アルバティーナは二階から型紙用の端切れと色鉛筆を持参して降りてきた。

サロンのテーブルにつくなり、ジョン・マンからライフル銃を受け取った。そして採寸用の巻き尺で寸法採りを始めた。

チャンスとジョン・マンは、アルバティーナの手慣れた採寸に見入っていた。寸法を採り終わると、端切れにスケッチを描き始めた。

銃の縮尺寸法が反映されたラフスケッチだ。ライフル銃を収めたあと、肩がけできるベルトまで描かれていた。

「雨のなかでも大丈夫なように、防水加工された帆布を使いましょう」

手元に帆布の余りがあり、銃ケースには十分な大きさだと請け合った。
チャンスとジョン・マンは感服して、ただうなずくだけだった。

「いまから取りかかるから、夕食ときには仕上がります」

アルバティーナは仕事に取りかかった。

ミシンはサロンに置かれていた。厚手のカーテンを開けば外光が差し込み、ミシン仕事がしやすくなる造りである。

「ありがとうございます」

ジョン・マンは深々と辞儀をして、サロンから出た。そのままキッチンに向かうと、デイジーが午後の紅茶の支度^{しど}を始めていた。

「いまからニューベッドフォードの海員礼拝所に行ってきます」

ステイグリッツ号への乗船を牧師に伝えるためである。ほろろのポットから強い湯気が出始めていたが、デイジーはジョン・マンを引き留めなかった。

すべてが乗船に向けて走り始めていたので牧師への返答は一刻でも早くと思ったのだ。

ホイットフィールド船長は、午後六時の帰宅予定で外出していた。

「今夜のディナーはヒト・キュウ・マル・マルからよ」

船員用語でデイジーが時刻を告げた。

「イエス。ママ」

デイジーに敬礼して、キッチンを出た。

*

蒸気船で渡ったあと、石畳の坂道を海員礼拝所へとジョン・マンは足を急がせようとした。が、

途中で気が変わり、港に戻った。

ニューベッドフォードの景気が下り坂なのは、港町の様子からも強く伝わってきた。

かつては毎週土曜日になれば、多数の馬車が食品店の前に並んでいた。坂上の屋敷から、一週間分の食品を買い出しに向いてくる馬車だった。

どの馬車も漆黒塗装の扉には、屋敷の紋章が金箔で描かれていた。

屋敷馬車に加えて、土曜日出航の捕鯨船に積み込むための食品荷馬車が、何台も列をなしていた。

屋敷馬車と食品荷馬車の交通整理のために、赤い帽子と赤い手袋をはめた整理員が、笛を吹き鳴らして馬車の行き来を誘導していた。

赤い手袋。鳴り響く笛。石畳を踏む馬の蹄鉄音。そして通りに充ちた馬糞のにおい。

夏場なら午後六時でも、まだ充分に明るかった。八月の日没は午後七時を大きく過ぎてからだった。

にもかかわらず午後六時の鐘が鳴るなり、街灯には鯨油が差され火を灯して回り始めた。

「ニューベッドフォードが東海岸一の捕鯨港であることを、街灯が示してくれよう」
船主組合の指図で、港の灯火は明るいうちから灯されていた。

一八四九年のいまでは、すっかり様変わりしてしまった。

すでに午後四時が近いというのに、食料品店前には、一台の馬車も停まっていはいない。交通整理の赤い帽子と赤い手袋も見えないし、笛の音も響いてはいなかった。

なによりジョン・マンが驚いたのは、ニューベッドフォード港の長い岸壁に、一杯の捕鯨船も

舫ちやわられていないことだった。

帆船が連なっていればこそ、長い岸壁の価値がある。いまは港に目を向けると、素通しで対岸のフェアヘブンの住宅地が見えていた。

捕鯨船の終焉しゆうえんは、確かな足音で近づいてきていた。ホイットフィールド船長にステイグリッツ号乗船を認められた意味を、ジョン・マンが哀しい想いで噛かみ締めていたとき。

ガララーーン……

港のベルタワーが午後四時を報しらせ始めた。

鐘の響きにも、いまひとつ威勢が失うせているように感じられた。

思わず港の端で足が止まった。

ライフル射撃をチャンスから評価されて、気分は大きく弾んでいた。

アルバティーナが銃ケースを手作りしてくれ、さらに気持ちは弾みを増していた。

渡し船の外輪が回る音は、腹の底にまで響いた。この船なら、どんな荒海でも乗り切るだろうと、音に勇気づけられた気がした。

ところが……。

元気のないニューベッドフォード港の景観に触れたことで、晴れやかだった気分がいきなり沈んだ。

おれは威勢を失いつつあるこの町を捨てて、ゴールドラッシュのなかへ逃げようとしているのか？

船長、アルバティーナ、チャンス、デイジーたちを残して、ひとり身勝手にサンフランシスコ

に行く気なのか……

石畳の坂道まで戻ったとき、ジョン・マンはおのれを責め始めていた。

チャンスは心底、西海岸行きを喜んでくれていた。

「おまえひとりのためじゃない。ハワイの仲間の船賃まで稼ぐためという、おまえの心意気は素晴らしい」

ライフル銃の射撃訓練が巧く運んだことも、チャンスは大いに喜んでくれた。

アルバティーナは、帆布で銃ケースまで作ってくれようとしていた。

そんなひとたちを、先細りが確かなこの町に残して、おれはひとりでサンフランシスコに行くうとしている。

これを思うにつけ、気が滅入った。

船長がサンフランシスコ行きを認めてくれたのは、果たして本心だったのか……と、新たな疑問まで湧いてきた。

ことによると、船長がまた乗ろうとする次の捕鯨船に、上級船員としての乗船を期待しておいでなのではないか？

不意にこれを使ったのは、ホイットフィールドが朝から出かけるときの姿を思い出したからだ。

「ステイグリッツ号に乗船することは、今日中にならざる伝えてきなさい」

船長は出がけに、これをジョン・マンに言い置き、馬車に乗った。そのときの物言いや表情も、いま思えば、ジョン・マンを突き放したようだった。

乗船を認めたのは、船長の本心ではなかったのかも知れない……

石畳を登る足が、いきなり重たく感じられた。いま登っている坂の途中に、海員礼拝所が見えていた。

あとわずかな距離なのに、登る気力が急速に失せていた。が、いまさら引き返せない。夕食に間に合うように、アルバティーナはサロンでケースを作ってくれているはずだ。足を止めたジョン・マンは、空を見上げた。曇天は分厚いが、雨の心配はなかった。

「たっすいことをすな！」

足を止めてしまった自分に、土佐弁で気合いをいれた。

たっすいことは土地の言葉で、しょうもないこと、だらしなないこと、気持ちが入っていないことなどの意味である。

たっすいことをすな！ は、強い叱責だった。

両手で頬をバシッと叩き、深呼吸をして歩き始めた。あとは海員礼拝所まで、一気に登った。扉に鍵はかかっている。いつ何どきでも、礼拝に訪れることができる。

牧師館につながるベルの紐を、ジョン・マンは気合いを込めて引いた。決めたことに迷わないという決意で引いた紐だった。

ほどなく牧師が顔を出した。

「やはりあなたでしたか」

ベルの響き方で、ジョン・マンの来訪を感じたと明かした。

「どうぞ、こちらへ」

案内された牧師館に一步を踏み入れたとき、ジョン・マンは驚きで棒立ちになった。

ステイグリッツ号船長と並び、ホイットフィールドが椅子に座っていた。

(つづく)